顔だちマップを用いた犬種の形態印象の分類

Classification of Morphological Impressions of Dog Breeds Using the Facial Features Map

今野晃嗣 [1)]、荒井沙穂理 [2)]、阿部恒之 [3)]

Akitsugu KONNO [1)], Sahori ARAI [2)], Tsuneyuki ABE [3)]

E-mail : abe1t@sal.tohoku.ac.jp

和文要旨

顔だちマップは意図した印象を得るためのメーキャップ支援ツールであるが、形態印象（フォルム・バランス）と人格印象（キュート・フレッシュ・クール・やさしい）の対応関係を整理する枠組みとしても機能する。阿部ら（2008）はこの対応関係が、表情と成熟性の過般化効果によって生じた親近－敬遠・依存－擁護の感情に基づくという仮説を提示している。本研究は、この仮説で示された印象形成機構が他の対象にも及ぶような一般性を有するかどうかを探るため、顔だちマップを適用してイヌの印象を分類した。

12 犬種の画像について 35 名の大学生がその形態印象・性格印象（顔だちマップにおける人格印象）・感情評価を評定した。各刺激を形態印象で構成した座標と性格印象で構成した座標それぞれに布置した後、顔だちマップと方向を合わせて重ねたところ、ほとんどの刺激の位置は近似していた。感情評価の因子得点については、フォルム軸と親近性、バランス軸と擁護性の間に強い関連が示された。イヌの基本的形態の影響を調べたところ、毛の長さはフォルム軸・フォルム軸 R・親近性のみと、体のサイズはバランス軸・バランス軸 R・擁護性のみと相関があった。

犬種刺激が顔だちマップの印象構造によって明瞭に分類されたことは、顔だちマップの頑健性と汎用性を示唆する。また、その印象構造は表情と成熟性の過般化効果によって生じた感情によってもたらされる可能性が支持された。ただし、犬種の印象形成においては、イヌ独自の形態要因が強い影響を及ぼすことが示された。

キーワード : 顔だちマップ、形態特徴、性格、過般化効果、犬種

Keywords : The Facial Features Map, Morphological features, Personality, Overgeneralization effect, Dog breeds

1. 緒言

顔の形態に基づいて人格を推測する現象は自動的に生じる社会知覚（social perception）の一種であり [1]、換言すれば人格印象認知機構に基づく顔の人格印象評価であると考えられる。例えば、丸い輪郭、大きく丸い目、小さな鼻、広い額といった童顔特徴を有する人物は、優しさや正直さといった特性は高く評価される一方、知性や競争心などリーダーとしての資質は低く評価される [1],[2]。

他方、ヒトは他の動物の外見からも内的特性を評価することがあり、その評価には「擬人化（anthropomorphism）」の知覚特性が作用していることが指摘されている [3]。これは、ヒトの顔の形態に適用されている人格印象認知機構が、動物を対象とした印象形成にも共通して適用されている可能性を示唆する。

本研究では、ヒトの顔の人格印象認知機構の適用範囲が他の対象にも及んでいるかどうかを検討するために、顔だちマップ [4]-[7] を用いて犬種の印象の評価・分類を試みた。

[1)] 東京大学大学院総合文化研究科、Graduate School of Art and Science, The University of Tokyo
[2)] 東北大学文学部、Faculty of Arts and Letters, Tohoku University
[3)] 東北大学大学院文学研究科、Graduate School Faculty of Arts and Letters, Tohoku University